

コラム39：東京そして鞆の浦

(2015. 2. 6)

たとえば、地方の小さなライブハウスで歌っていた歌手が、ある日 NHK の紅白の舞台に立っていたような・・・

たとえば、いつも県予選で敗退していた高校野球のチームが、なぜか甲子園に出場してしまったような・・・

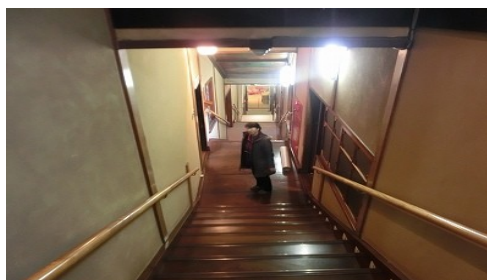
そんな、「とまどい」と「誇らしさ」の混在した、それでいて怖気づくこともなく、晴れがましい表情でしたよ。

東京の目黒雅叙園「漁礁の間」、きらびやかな日本間の、とてつもなく大きな高い雛段に飾られた雛人形たちのことです。



「どうしてそんな所に行ったんじゃ？わけがわからんわい」と言われそうですね。今年の1月23日から、ここで行われる「百段階雛祭り」(1/23～3/8 開催 会期中無休))の準備のため、1月19日から4日間上京しました。東京に春を告げる風物詩となってきた、この雛飾りのイベントも今年で6年目となります。第1回の山形の雛人形から始まり、去年は九州からの出展、そして今年は瀬戸内地区からということで、毎年福山の鞆の浦で雛飾りをしている、妻の雛人形の「出番」ということになったわけです。

今回の出展のために、意図的に動いたというより、妻がこれまでの長い収集歴の中でいろいろな方との縁があったことで、一昨年の秋に雅叙園よりオファーがありました。その頃から、担当者の方と何度も打ち合わせや準備を、これまでしてきました。今回の上京の目的は、開催前の最後の仕上げとも言える、飾り付け作業のためです。妻も人生に二度とないビッグなステージに雛飾りをするというので、特に気合が入っていましたね。



私たちの仕事は、輸送されてきた人形の取り出しに立ち会い、あらかじめデザインされた図案に従って並べられたことに対して、出展者としての希望を伝え、許される範囲で手直しをしていくことでした。入念に計画された展示であっても、主催者と出展者の思いのズレはどうしても生じます。そういう意味では、展示の現場に立ち会って、私たちが納得できる形に、最後まで見届けることができたのはよかったですね。

目黒雅叙園の百段階というのは、戦前の昭和初期の建築物ということで、東京都指定有形文化財となっているようです。「昭和の竜宮城」と謳われる華麗な和室に、妻の収集した雛人形が合うだろうか、「負ける」のではないかと、という危惧はありましたね。しかし、文頭に記したように、見事に彼らは「共演」してくれましたよ。人形の扱いに慣れた専門スタッフも多く、心配したような大きなトラブルもなく、2日間で飾り付けはほぼ終了し、3日目のレセプション(招待会)とマスコミ取材の対応も、順調に終了することが出来ました。

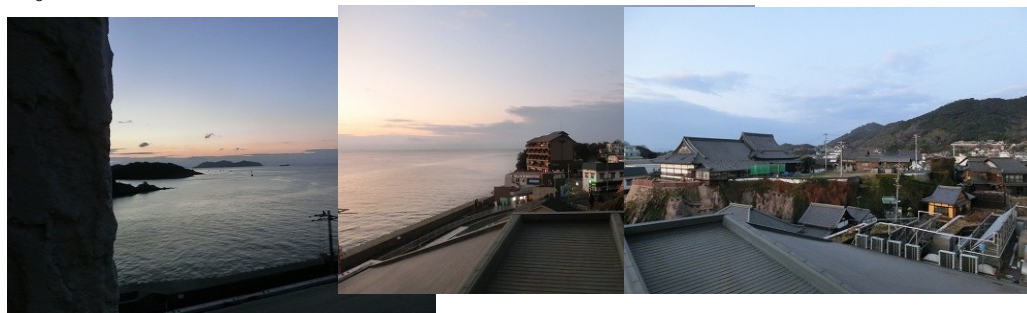


それ以上に良かったのは、「瀬戸内ひな紀行」と謳われた今回の雛展示で、兵庫や岡山からの出展者や、雅叙園の担当スタッフの方、人形専門の業者の人たちなど、多くの人と知り合い、ともに「百段階雛まつり」という大きなイベントを創り上げる仕事が出来たことですね。このようなことは、妻にとっては「人生の宝」ともいうべきものでしょうし、私も貴重な経験を「共有」することが出来ました。

雛飾りを終えた2日目の夜、今回の出展者が全員そろって夕食会がありました。その時にフッと思ったことがあります。こういう稀有な経験をする事が出来たのは、妻の「度が過ぎた人形収集」のお蔭ではないのか。人形を見てもらうことで、多くの人が喜び、合わせて私たち自身も「幸福な気持ち」になっているのではないのか。「馬鹿なこと」に、金と時間と情熱を注ぐ、妻のような人間がいるから、世の中は面白いし、まわりの人の人生も楽しいものになるんじゃないか。そんなことを考えましたね。

おもしろき こともなき世を おもしろく 高杉晋作

東京での仕事を終えて1週間後、1月30日からは毎年恒例の鞆の浦詣でということで、「太田家の雛祭り」(2/1～3/30 開催)の飾り付けです。こちらはもう13年目、冬の一番寒い時で、車で行くのも、雛飾りをするのも大変なのですが、良く続いています。本音を言えば、「女房が勝手にやっとなる趣味道楽に、なんでワシが付き合ひにゃいけんのんじやい?！」という感じなのですがね。そうは言っても、これだけやっていると、「太田家を守る会」の人たちなど、鞆の浦の人たちとも懇意になりますし、行きつけの店もできましたし、毎年見慣れた風景を楽しんで、「いい旅」になっていると思いますね。



以前は、妻の「飾り付け助手」として、側で運搬や箱出しをしていましたが、これが意外とストレスが溜まるんです。指示する妻も、指示される私の方も、イライラして疲れるのですね。今は座敷や

土間の飾り付けは、妻と太田家の人たちに任せて、私は蔵の中で、自分の「雛人形の世界」を創ることに専念しています。「太田家」については「コラム8 町並み雛めぐり」や「コラム20 旧家の雛祭り」にすでに書いていますので、ここでは詳述をしないことにしましょう。

それにしても江戸中期、今から260年前の酒蔵というのは、寒いですね。実際には、ここは蔵というより、酒づくりの現場なので、石をぶら下げた大きな「絞り機」やカメが置いてあります。かつては沢山のふんどし姿の男たちが、汗まみれで働いていたのです。言わばここは、江戸から明治、大正と栄えた、軀の浦の「保命酒造り」の心臓部ということなのですね。そんな場所に、1日中一人でこもって、妻に任された土雛(つちびな)とキャラクター雛を、大きなカメの上や、古い桶や柄杓などの中に飾るのが、私の仕事です。ひどく寒々とした、ひどく静かな蔵の中で、孤独な作業をしつつ、フッと手を休めると、後ろの方から聞こえてくるのです。ずーと遠い昔、この場所で働いていた男たちの、威勢の良い掛け声、力強い足音、それと一緒に彼らの汗と熱気と酒の臭気まで……

春寒や 江戸の酒屋に 雛遊ぶ

今回の私のコーナーの自己採点は、70点位ですね。土雛は山形物を中心にしたのですが、もう少し人形の産地や時代の情報が欲しかったですね。キャラクターの方はディズニーがメインですが、次回にはもっと華やかに沢山の人形を、立体感のあるようにしてみたいものです。早くも来年の展示の事を考えるようでは、私も妻に感化されて、「雛人形の霊」が乗り移ってしまったのかもしれません。



妻が雛人形を集め始めたのは、いつ頃からでしょうか。私の記憶では、次男が生まれた後くらいですから、もう30年以上になると思います。当初は骨董屋や骨董市廻りが中心でしたが、最近はネットオークションと、今までに作った「雛人形収集の人脈」が中心のようです。一時は、毎日のように宅急便が届いて、家の中の押入れ、天井裏や床下、さらに子供部屋や応接間に至るまで人形箱で一杯になりましたよ。「人形のおかげで人間が住むところがない！どっちが大切なんじゃ！」と怒鳴っても、「人形に決まっているでしょ！」という返事のみ。口喧嘩は絶えることなく、「離婚の危機」も数知れず。それゆえ、私は自分自身を、「妻の異常な人形収集の最大の犠牲者」と思っていましたね。

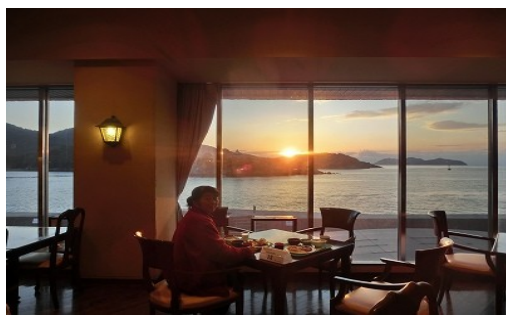


妻の雛人形コレクションの中には、江戸、明治の貴重なものもあります。しかし、私に言わせれば、一部のものを例外として、妻の所有しているものは、ほとんどが「ガラクタ」ですよ。出所不明の土雛、人気アニメのキャラクター雛、さらには昔の少年少女雑誌の付録の紙雛や、雛人形の紙芝居までいろいろと……。なぜなら彼女は骨董的価値のあるものを集めているというより、「きれい！」「カワイイ！」「面白い！」という視点で収集しているものが多いからです。本人にしてみれば、こんなものでも「宝の山」なのでしょうが、こちらは実に迷惑なのです。要するに、人形を入れる収納スペースが、普通の家に入る許容量を超えてしまった、ということなのです。しかし、これについては何年

か前から、太田家の酒蔵の中に保管してもらうことで、一応の解決を観ましたね。

もう一つの問題である人形購入の「浪費」についても、以前ほど「いい出物」がなくなって、買う頻度がだいぶ落ちてきているようですね。家計が破綻するほど入れ込んだわけでもないし、子供たちも一応自立してくれたし、妻の唯一の「道楽」と思えば仕方がないかな、と今は「諦めの境地」です。「子に美田を残すなかれ」と言いますが、子供に財産を残すより、自分の人生の好きなことに使う方がいいに決まっていますよ。資産家でもなく、二人ともごく普通の会社員の収入の中で、よくあれだけ集めたもんだと、アキレルやら、感心するやら、といった所ですね。

「どうして雛人形なんかに夢中になったんじやろう？」と聞かれても、「ワシにも、ようわからん」としか言えないですね。おそらく妻にも答えられないでしょう。人が「こだわり」をもって物を集める心理というのは、理屈では説明できない部分があるようです。「そこに山があるから」というだけの理由でしょうね。彼女に言わせれば、「不思議な縁で、人形が私の所に集まってくるんよねえ」ということになるんですが……。しかし、多少の「幸運」はあったにせよ、人形は、彼女の「情熱」と「足」で集めたものです。生来の凝り性で、中途半端では治まらない性格ですからね。



確かに、収納、浪費、労力等々、今までいろんな問題が生じ、散々喧嘩もしました。反面、よく考えてみると、人形が私に、人生の一番大切なものをくれたようにも思うのです。今回のような「出会い」をさせてくれたのは、まぎれもなく妻が所有している雛人形なのです。雅叙園の中で雛飾りをしている時に、誰かが妻に言ったそうです。「あんたは雛人形が生き残るために生まれてきた人かもしれんねえ」。そうだとすると、さしずめ私は、雛人形を守る主人

人に仕える、忠実な僕(しもべ)といったとこですかね？結婚35年にもなると、どちらが「主人」でも「僕」でも、もうどうでもいいじゃないか、と思いますよ。「婦唱夫随」(?)でもかまいません。「おひなさま」のおかげで、私も数奇な「オモロイ人生」を送っているんですから、まあ良しとしましょうか。

最後に、昨年9月にガンの手術をうけ(コラム35: 古い 参照)、無事に復帰、退院した時の妻のセリフで今回は締めましょう。

「雛人形がワタンを守ってくれたんじやろうね。ワタンがおらんようなら、人形は生き残れんのんじやけえね」

